【自由題・詩】　中学生・高校生の部

ともなり文芸大賞

受験生

矢板中学校三年　筒井　悠翔

受験生なんだから勉強しなさい
母が綿あめのように優しい声で言う
分かってるよと返す僕

受験生なんだから勉強しなさい
父と母が歩き立ての赤ちゃんを見守るような心配そうな声で言う
分かってるよと呆れた声で言う僕

受験生なんだから勉強しなさい
家族全員から蛇のようにしつこく言われる
分かってるよと吐き捨てる僕

受験生なんだから勉強しなさい
家族や親戚からもう十分勉強したと言わんばかりに、台本をこなすように
言われる
分かってたよと今までの自分を誇り自信満々に伝える僕

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

ともなり文芸準大賞

真夏の夜

矢板中央高等学校三年　WANG YU（ワン ユ）

真夏の夜はいつも蝉の鳴き声が伴う
夜の風はいつも体を撫でる
軒と石に滴り落ちる小雨は奏楽のように滑らか
田蛙の声もこの夏に合う飾りとなる
眠りの中で憧れの花火が輝いている
ここの繁華の影のように風鈴に刻まれる
部屋の清らかな香りは余風と共に全身に浸っている
蛍も盈盈の時に夢に美しい飾りをもたらす

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

ともなり文芸奨励賞

本当は

矢板中学校三年　神山　奈菜

子供にはわからない大人のホント
親にはわからない子供のホント
僕には大きな夢がある
僕にだってやりたいことがある
だから少しは聞いてほしい
私には守る使命がある
私にとって代わりのない人
だからワガママを我慢して
僕なりにいっぱい頑張ってるよ
ワガママを言いたい訳じゃない
あなたのために努力してるよ
制限したい訳じゃない
僕にはわからない親のホント
私にはわからない子供のホント
素直に言えたらいいのになぁ

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

ともなり文芸奨励賞

過去と未来を超えて

矢板中学校三年　印南　侑璃

ふと思うことがある
どうして空は青いのだろう
どうして海は青いのだろう
調べれば答えは分かるだろう

ふと思うことがある
どうして嫌いな人がいるのだろう
どうして好きな人がいるのだろう
それは私の見方の問題

ふと思うことがある
どうして生き物はいるのだろう
どうして私はいるのだろう
それは誰かの愛で生まれたから

ふとした瞬間思うこと
それはきっと
未来を生きるもの
過去を生きたもの
私は今を生きているもの

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

ともなり文芸奨励賞

ぼくの一日の始まり

矢板中央高等学校三年　大塚　羚那

公園の片隅にある小さなベンチの上で大好きな本を持って座るぼく
空も青くきれいだ
雲もいろんな形をしている
例えばハートの形、竜の形など
風と一緒に木の葉も揺れ出した
そして、ずっと青空を見て周りを見るとどこからか笑い声が聞こえる
小学生や中学生たちが楽しそうにはしゃぎ話している
そのうち風と一緒にシャボン玉がたくさん空に向かって
どこか遠くに飛んで行く
ぼくもいろんなことを忘れてゆっくりゆっくりとシャボン玉のように
どこか遠くへ行きたい
そして、旅をしていろんな景色を見てみたい
そんな時、雨雲がやってきた
あんなに空は青かったのに
急に暗く黒い雲に覆われてぼくの心もどんより沈む
そのうち雨が降り出して、ぼくの嫌いな雨音が響き、服もずぶ濡れとなる
ああ、最悪な気分だ。
あさはあんなに晴れやかだったのに

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

矢射る音

矢板中学校一年　西山　夏生

「スパーン」
矢が的に当たる
音弓道場に響き渡る
部活動見学で
僕の胸に迷わず突き刺さった

初めて身につけた
白い道着と黒い袴
身の引き締まる思い
初めて的を前に立った時
緊張と嬉しさが入り混じり
頭が真っ白になった
大きく深呼吸をし
遠くの的を見つめ
息を止め狙いを定める

「サクッ」
初めて打った矢の刺さる音
的に当たるはずもない
いつか「スパーン」と音が出せるよう
日々の練習に励んでいる

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

二十四時間テレビ

矢板中学校一年　羽石　絆音

二十四時間テレビが始まると
夏休みが終わりに近づくと気づく
世の中にはつらい病気を抱えた人がいる
たくさんの困難を乗り越えて
たくさんの努力をして
どうしてこんなに神様は不平等なのか
そんな思いがよぎる

僕は毎日を大切に生きているのか
今日やることがあっても明日やればいいかな
今日は携帯をたくさん使ってしまったな
今日の勉強は少しで終わりにしよう
そんな日を過ごすことのある僕にとって
二十四時間テレビは
一年に一度を考えを正す
二日になっている

一日一日を大切に生きていこう
そう思う

※二十四時間の「二十四」について原作は数字の「2と4」

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

お盆休み

矢板中学校二年　藤田　亜希

お盆休み
私の曾祖母
馬に乗って
橋を渡って
私達に会いに来た
提灯の明かりに照らされて
線香の香りがした四日間
あっという間に過ぎてしまった
私の曾祖母
牛に乗って
橋を渡って
私達にさよならを言った
家の明かりが消える前に
曾祖母を思い出した今宵は
心がとても温まった

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

花火

矢板中学校二年　小川　海

ドーン
大きな音がした
暗い夜空に光が満ちる
ドーンバチバチバチ
大きな音がしたら
暗い夜空に光のシャワー
ドーン
ドーン
ドーン
暗い夜空に
たくさんの光の大輪が競い合う
花火を見て思った
私は光の花を咲かせるかな
私は花火のように力強くなれるかな
ドーン
私は花火のように
希望に満ちた
光の花を咲かせよう

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

ヒマワリ

矢板中学校二年　小川　留稀也

黄色を照らすヒマワリが
夏の風に吹かれて
ゆらりゆらりと
気持ち良さそうにゆれている
ヒマワリ畑が
子どもたちの走る風に
ゆらりゆらりと
気持ち良さそうにゆれている
そうやってヒマワリは
いろんな風に吹かれながら
ゆらりゆらりと
気持ち良さそうに
夏が終わる

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

今日は

矢板中学校二年　星野　快心

今日は夏休みの初日
まだ始まったばかりだから
深夜までゲームをする
今日は湖に行く
まだ夏休みの中盤だから
めいいっぱい楽しみたい
今日は定期テスト対策をする
まだ十日以上休みだから
勉強は三十分くらいでいいだろう
今日は残りの宿題を終わらせよう
もう一日しかない
この前まで
一ヶ月ぐらい時間はあったのに

※三十分の「三十」について原作は数字の「３と０」

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

向日葵

矢板中学校二年　猿橋　陽向

夏になると咲くまるで人のようなひまわりが
ひまわりの向く方向はいつも違う
ひまわりの向く先見ると青い空と真っ赤な太陽
青い空と真っ赤な太陽に向かってひまわりはいつもいつも笑っている
私もひまわりのようにみんなの前では笑っていたい
私も輝く太陽に向かって明るく笑顔で生きていたい
私はあなたに憧れたあなただけを見つめている
いつまでもいつまでも向日葵のように

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

嫌われ者

矢板中学校二年　竹澤　和奏

みんなゴキブリやムカデが嫌いだけれど
私はその虫たちがちょっぴり好き
色々言われようとも潰されようとも
毎日強く生きているから
私達人間は悪口を言われたり叩かれでもしたら
落ち込んだり泣いたりするけど
その虫たちは違う
虫たちの嫌われ者を代表しながら
ひっそりと影に生きながらも
希望に包まれた心の中で
たくましく生きる
私はそんな虫達から今でもたくさんのことを学んでいる

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

日本の四季

矢板中学校二年　八木澤　沙彩

春はドキドキ
新しいクラス
新しい教科書
新たな気持でスタートする

夏はワクワク
部活に燃える
プールで泳ぐ
楽しい夏休みを過ごす

秋はランラン
おいしい食べ物
読書の秋
赤や黄色の紅葉で気持ちが高まる

冬はキラキラ
つららに雪
真っ白な世界にキラキラひかる
四季がある日本にうまれてうれしいな
気持ちも彩る

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

四季空気

矢板中学校三年　増村　将伍

春の空気
硬く冷たい空気から
優しく暖かい季節
暖かくとても心地よい

夏の空気
優しく暖かい空から
湿った暑い季節
暑くてとても心地よい

秋の空気
湿った暑い空気から
乾いた涼しい季節
涼しくとても心地よい

冬の空気
乾いた涼しい空気から
硬く冷たい季節
冷たくとても心地よい

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

俺はシャーペン

矢板中学校三年　室井　衿緒

俺はシャーペン
人気である
コンパクトで色とりどりでかっこいい
便利な機能がついてるやつもいる
鉛筆と違って人気である

だけど
分解されて遊ばれるし
芯がすぐ折れる
鉛筆が羨ましい

でも違う
それだけ良い機能がついてるし
芯ならすぐ補充すればいい
鉛筆は鉛筆の良さがあるし
俺にも良さがある
俺はシャーペンだ

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

矢に託すあの思い

矢板中学校三年　中村　優月

矢に託すあの思い
一瞬にして過ぎる時間
周りの弦音が秒針を刻むように
カンという高い音
沢山の人の声
研ぎ澄まされたこの心には
自分しかいない大舞台
屋の流れに任せたこの一射
心を込めて放つ一射
矢が的に当たった瞬間
喜ぶ自分と安堵する自分
弓を引く
この一瞬に
自我と向き合い
心を磨く
この鍛錬

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

色

矢板中学校三年　薄井　萌百花

窓の外
広がる世界は
今日も明日も明後日も
色とりどり違う色で
染まっている

明るい色だったり
暗い色だったり
それはまるで

私の心を表しているようで
心の中を見られているよう
少し恥ずかしい気もする

さあ明日は何色だろうか
何色に染まるのだろうか

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

今年は受験生

矢板中学校三年　青山　帆加

今年は受験生
新たな目標を持つ
だが、目標を決めたとしても途中で何度も心が折れてしまう
絶対にできる
自分なら乗り越えられると
毎日のようにたくさん励まして
少しでもいいから努力する
結果、その小さな努力だけでも
おおきな成功となる
たくさん努力するとすごくおおきな成功となる
諦めないでたくさん努力していこう

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

翔平くん

矢板中学校三年　羽石　凛音

お母さんのお腹にいるときから
心臓の病気をかかえていた
どんな困難にも勝てるようにと
「翔平」と名前をつけてもらった
あの大谷翔平さんの名前だ

病気を治すためには海外での手術が必要である
たくさんのお金が必要である
たくさんの人が翔平くんを思い
たくさんの寄付があつまった

しかし渡航する前に
翔平くんは天国へ旅立った
たくさんの寄付金だけが残った

つらい結末だと感じた
しかしその寄付金で助かった命がある
翔平くんの母は言いました
翔平がつなげた命ですと
すごく嬉しいと

私が母になるとき
同じように言える母になりたいと
強く思った

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

思い出

矢板中学校三年　堀田　琉心

三年前
ランドセルを背負ってた頃が懐かしい
三年前
真っ黒になって遊んでいた頃が懐かしい
三年前
初めて会う友達とぎこちない会話をしたのが懐かしい
一年前
部活動に明け暮れていた日々が懐かしい

今はただ目標と戦う日々
参考書とにらみ合う日々
長い夏休みの半分以上は勉強の日々

残りの学校生活頑張るのみ
目標に向かい全力を尽くして受験にはげむのみ

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

夏草

矢板中学校三年　青柳　小百合

踏まれて伸びて
踏まれて伸びて
ぴょこっと双葉が顔を出す
双葉は立派な青葉となる
照りつける日差しにも耐え
雨風にもビクともしない
踏まれて伸びて
踏まれて伸びて
たまには泣いてもいいんだよ
弱音を吐いてもいいんだよ
独りじゃないから大丈夫
誰かがきっと見守ってる
踏まれて伸びて
踏まれて伸びて
努力の分だけ大きくなる
涙の分だけ輝ける
地面に根を張り続けよう
だって君は立派な雑草

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

シャボン玉

片岡中学校二年　手塚　海優

寂しさ片手に　シャボン玉を飛ばす
一つのシャボン玉が飛ぶ
シャボン玉は悲しそうに飛んでいる
二つのシャボン玉が飛ぶ
シャボン玉はくっついて楽しそうに飛んでいる
三つのシャボン玉が飛ぶ
シャボン玉はまたくっついて支え合いながら飛んでいる
四つのシャボン玉が飛ぶ
シャボン玉は一人で気ままに飛んでいる
五つのシャボン玉が飛ぶ
シャボン玉は弱々しく飛んでいる
六つ、七つ、八つ、九つ、十
沢山シャボン玉が飛ぶ
気づけば周りはシャボン玉だらけ
なんだかとっても温かい
寂しさは、シャボン玉が割れるとともになくなった
私はもう独りじゃない

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

あいさつ

矢板中央高等学校一年　島﨑　優次

あさいちの「おはよう」
ぼくのやるきをおこすまほうのことば
「こんにちは」
こころがうきうきとしてうれしくなる
「こんばんわ」
いちにちのできごとをこころみる
「おやすみなさい」
いちにちなおわりをじっかんする
「ありがとう」
かんしゃされるとてれてしまう
「ごめんね」
けんかしたともとのなかなおり
「がんばろう」
なんでもできるきもちになる
さまざまなひとからおおくのことばをもらった
ぼくもおおくのことばをひとにつたえた
きみからもらったことばはいまもぼくのこころにしっかりとのこっている
おちこんだときのことば
「ふぁいと」

【自由題・詩】　中学生・高校生の部

入　選

夏の思い出

矢板中央高等学校一年　高瀬　遥基

夏の風が心地よく
海辺に笑顔
砂浜に足跡を残す
心に想う人との
淡い思い出
太陽照らす青空の下で
夢を追いかけ故郷を離れる
夏の終わりを告げる涼風に、
ふと、あの日の夏を思い出す